成人看護学臨地実習における実習前の教育的介入の一考察：
実習達成度自己評価と事前面接による学習支援に焦点をあてて

A Consideration of Pre-practice Educational Intervention in Clinical Practice for Adult Nursing: Focusing on Self-Evaluation Performance during Practice and on Learning-Support through Preliminary Interviews

柴　田　和　恵
Kazue SHIBATA
前　田　明　子
Akiko MAEDA
小　林　千　代
Chiyo KOBAYASHI
菊　地　美　香
Mika KIKUCHI
白　石　直　美
Naomi SHIRAISHI

Conducted on 82 fourth-year students in the nursing school of A College who were scheduled to undertake clinical practice for adult nursing (practice hereafter), this study aimed to clarify the actual conditions of self-evaluation of their practice performance and to evaluate the effectiveness of learning-support through preliminary interviews.

Practice performance was self-evaluated, with primary focus on the following 6 categories: (1) interpersonal relations, (2) nursing procedures, (3) nursing techniques, (4) safety and responsibility, (5) ethics, and (6) basic knowledge and learning methods. In addition, the survey made use of self-made questionnaires, and simple tabulation and U Tests were conducted to determine correlations between the items and to make comparisons between the results before and after the practice.

The results of this self-evaluation of practice performance showed higher scores after practice in all areas, with closer relationships between certain learning categories. In particular, item (6) above was found to be significantly correlated with items (1), (2), (4) and (5), while item (5) was in turn correlated with items (1) and (4), and item (1) with item (4).

Also, when asked to evaluate the appropriateness of the timing of the pre-practice educational intervention and the effectiveness of both self-evaluation of performance and learning-support by preliminary interviews, 90% of the students expressed satisfaction.

天使大学 看護栄養学部 看護学科
(2008年１月21日受稿、2008年３月28日 審査終了受理)

本研究では、成人看護学臨地実習（以降実習）を実施予定のＡ大学看護学科４年生82名を対象に、実習達成度自己評価の実態と事前面接による学習支援に関する評価を明らかにした。実習達成度自己評価は、①対人関係②看護過程③看護技術④安全性・責任⑤倫理的配慮⑥基礎知識・学習方法の６項目、その他は自作の質問紙を用いて調査し、単純集計および項目間の相関、実習前後比較をＵ検定した。その結果、実習達成度自己評価は、実習後に全項目有意に高得点を示し、【基礎知識・学習方法】は、【対人関係】や【看護過程】、【安全性・責任】、【倫理的配慮】と、【倫理的配慮】も【対人関係】や【安全性・責任】と、【対人関係】は【安全性・責任】と有意な相関を認め、学習項目間の関連が高まっていた。また、今回の実習前の教育的介入の開始時期や達成度自己評価、事前面接による学習支援は、９割以上の学生が適切と評価していた。

Key words: adult nursing（成人看護学）
clinical practice（臨地実習）
self-evaluation of practice performance（実習達成度自己評価）
preliminary interview（事前面接）
nursing student（看護学生）

Ⅰ．はじめに

看護学臨地実習（以降実習と称する）は、学生が既習の知識・技術を基に、クライエントと相互行為を展開し、目標達成に向かいつつ、そこに生じた看護現象を教材として、看護実践に必要な基礎的能力を習得するという授業である[1]。そのため実習では、到達目標を明確化して、段階的に評価を行い、学生の到達レベルを判断し、学生が効果的に学べるように実習環境を整えることが教員の役割として重要と考える。一方、桑村他[2]は、実習全体を通して各領域に共通する実習固有の学習内容、すなわち、教育理念に基づく卒業時の学生の特性を反映した総合的な見地からの評価の必要性を指摘し、学生が実習固有の目標に向かって実習を進めるためには、学生自らが到達のどの時点にいるかを認識する必要があると述べている。また、看護学生の自己評価の活用は、学生自身が自ら学び、考える力を持つ自己教育力の育成につながるものとして重要視されており[3]、その活用についての示唆を得ることも有用と考える。

Ａ大学の実習では、領域別に実習終了後、その領域特有の目標に照らし合わせて達成度評価が実施されてきたが、各領域に共通する実習固有の学習内容についての評価認識は不充分であった。成人看護学の領域でも、学生が実習前にどのような課題をもっているかを簡単に記述してもらい、実習初日に確認し、実習中の指導に生かしてきた。しかし、従来の方法では、達成状況や課題の記述が曖昧あるいは抽象的で把握しにくい状況があった。また直前での確認のため、個々の学生への課題達成に向けての事前学習やその意識づけが不十分となっており、目標達成に向けた効果的支援に至っていなかったと考える。そのため2007年度は、実習開始の約６週間前の全体オリエンテーション時に学生自身にこれまでの実習経験を踏まえ、現時点での達成度を各領域に共通する実習固有の学習項目を用いて、学生に自己評価してもらい、課題を共通認識すると共に学習計画への支援面接を設定し、主体的事前学習を行った上で実習に臨めるよう教育的介入を試みた。

そこで今回は、今後の実習指導に生かすために今年度の取り組み内容についての評価を明らかにすることとした。

Ⅱ．研究目的

本研究では、実習前の教育的介入への示唆を得るために、各領域に共通する実習固有の学習項目の達成度自己評価を実習前後比較するとともに事前面接による学習支援に関する評価を明らかにすることを目的とする。

Ⅲ. 研究方法

1．対象

2007年度前期に成人看護学臨地実習の慢性期あるいは急性期のいずれかを実施予定のＡ大学看護学科４年生82名。

2．時期・方法・内容

1）時期：

2007年４月～８月

2）方法：

４月の実習全体オリエンテーション時に、現在の実習達成度自己評価と実習までの学習計画について所定の用紙を配布し、記述後に提出してもらった。これらをもとに、担当教員が事前面接し学習支援を実施した。また、実習評価終了後に達成度自己評価を実習前と同様の項目で自己評価してもらい、実習前の教育的介入に関する評価を提出してもらった。なお、いずれも教育指導の一環として個別指導を実施するため記名式としたが、本研究参加協力への同意の得られた者のみのデータを研究対象として用いた。

3）内容：

実習達成度自己評価の内容は、Ａ大学であげている各領域実習に共通する６つの学習項目すなわち、①対人関係 ②看護過程 ③看護技術 ④安全性・責任 ⑤倫理的配慮 ⑥基礎知識・学習方法について、４段階評価（４：よく達成　３：達成　２：達成不充分　１：ほとんど未達成）を行った。

また、担当教員の事前面接による学習支援では、達成度自己評価が極端に低い場合（達成度１あるいは２）や、極端に高い場合（達成度４）には、その根拠を確認すること、自らあげた課題内容の妥当性、学習計画の具体性について助言をすることを教員間で共通認識したうえで実施した。

さらに、実習前の教育的介入に関する評価項目として、＜学習支援開始時期＞、＜シートを用いた達成度自己評価＞、＜シートを用いた学習計画立案＞、＜担当教員による事前面接・指導＞の４点をあげ、４段階評価（４：適切　３：まあまあ適切　２：あまり適切でない　１：不適切）を実施した。

3．実習の概要

Ａ大学では、２年次に基礎実習を行い、３年次後期から地域、老年、母性、小児の４領域での実習が開始される。４年次には原則として、４領域の実習体験を積み重ねた後に、成人（慢性・急性）と精神の領域が平行して進む構造になっている。

なお、成人の実習は、１クール３週間で前期に慢性（あるいは急性）を実習したものは、後期に急性（あるいは慢性）を実施する。

4．分析方法

実習達成度自己評価は、単純集計および項目間の関連はスピアマンのロー検定、実習前後比較にはＵ検定を用いた。また、実習前の教育的介入に関する評価は、単純集計した。なお、統計処理には、SPSS 11.5J for Windowsを用いた。

5．倫理的配慮

対象者には、後期実習開始前のLHR（ロングホームルーム）時に研究者より研究の趣旨を文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。具体的には、研究参加は自由意志で参加の有無が成績評価には影響しないことを保証すること。同意後でも中途辞退が可能であり、それによって不利益を被らないこと。またデータは、本研究の目的以外に使用せず、個人が特定できないように処理し、プライバシーの保護を約束すること。終了後のデータはシュレッダー処理すること。さらに、研究結果は学術雑誌等に公表すること等が含まれる。

Ⅳ. 結　果

2007年度前期に成人看護学臨地実習の慢性期あるいは急性期のいずれかを実施する予定のＡ大学看護学科４年生82名を対象とし、73名（女性69名、男性４名）から研究参加の同意が得られた。

1．実習達成度自己評価の特徴

1）学習項目の特徴

実習前後の項目別達成度ならびにＵ検定の結果を表１、実習前後の項目別達成割合を表２に示す。

実習前の項目全体の達成度平均値は、2.65±.34点で、達成度３以上の割合（以降達成

表１．項目別達成度の実習前後比較

	順位	実習前 n＝72		順位	実習後 n＝73		U検定
		平均値	標準偏差		平均値	標準偏差	
対人関係	3	2.79	0.65	1	3.57	0.60	***
看護過程	6	2.18	0.45	5	2.96	0.54	***
看護技術	4	2.68	0.53	6	2.94	0.50	**
安全性・責任	1	2.99	0.66	2	3.44	0.55	***
倫理的配慮	2	2.96	0.59	3	3.43	0.65	***
基礎知識・学習方法	5	2.28	0.59	4	3.10	0.61	***
全項目平均		2.65	0.34		3.24	0.27	*

*** p＜.001, **p＜.01, *p＜.05

表２．実習前後の項目別達成割合

		対人関係		看護過程		看護技術		安全性・責任		倫理的配慮		基礎知識・学習方法		合計	
		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
よく達成	人数	9	46	0	9	1	6	15	34	11	37	1	17	37	149
	%	12.5%	63.0%	0.0%	12.3%	1.4%	8.2%	20.8%	46.6%	15.3%	50.7%	1.4%	23.3%	8.6%	34.0%
達成	人数	39	23	15	51	48	57	41	37	47	30	22	46	212	244
	%	54.2%	31.5%	20.8%	69.9%	66.7%	78.1%	56.9%	50.7%	65.3%	41.1%	30.6%	63.0%	49.1%	55.7%
達成不充分	人数	24	4	55	13	22	9	16	2	14	6	45	10	176	44
	%	33.3%	5.5%	76.4%	17.8%	30.6%	12.3%	22.2%	2.7%	19.4%	8.2%	62.5%	13.7%	40.7%	10.1%
ほとんど未達成	人数	0	0	2	0	1	1	0	0	0	0	4	0	7	1
	%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	1.4%	1.4	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	1.6%	0.2%
計		72	73	72	73	72	73	72	73	72	73	72	73	432	438

率とする）は、57.7％であった。達成度平均値が高かった順にあげると①【安全性・責任】の2.99±.66点で達成率77.7％、②【倫理的配慮】2.96±.59点、達成率80.6％、③【対人関係】2.79±.65点、達成率66.7％、④【看護技術】2.78±.53点、達成率68.1％、⑤【基礎知識・学習方法】2.28±.59点、達成率32.0％、⑥【看護過程】2.18±.45点、達成率20.8％であった。

実習後の項目全体の達成度平均値は、3.24±.27点で、達成率89.7％であった。達成度平均値の高い順に、①【対人関係】3.57±.60点、達成率94.5％、②【安全性・責任】3.44±.55点、達成率97.3％、③【倫理的配慮】3.43±.65点、達成率91.8％、④【基礎知識・学習方法】3.10±.61点、達成率86.3％、⑤【看護過程】2.96±.54点、達成率82.3％、⑥【看護技術】2.94±.50点、達成率86.3％であった。

実習前後比較では、全体（p＜.05）および項目別（【看護技術】p＜.01, その他の全項目 p＜.001）にみてもすべて有意に実習後に高得点となっていた。

2）学習項目間の関連

学習項目間の相関関係を表３に示す。実習前においては、【対人関係】は【看護技術】（r＝.309,p＜.01）や【安全性・責任】（r＝.422,p＜.001）と、また【看護過程】は【基礎知識・学習方法】（r＝.503,p＜.001）と有意な正の相関が認められた。しかし、【倫理的配慮】は、どの項目とも関連は認められなかった。

実習後においては、【基礎知識・学習方法】は、【看護技術】を除く４項目すなわち【対人関係】（r＝.404,p＜.001）、【看護過程】（r＝.388,p＜.001）、【安全性・責任】（r＝.342,p＜.01）、【倫理的配慮】（r＝.315,p＜.01）と有意な正の相関が認められた。また【倫理的配慮】は、【対人関係】（r＝.403,p＜.001）や【安全性・責任】（r＝.565,p＜.001）と、【対人関係】は【安全性・責任】（r＝.538,p＜.001）とも有意な正の相関を認めた。しかし、【看護技術】は、どの項目とも関連が認められなかった。

2．実習前の教育的介入に関する評価

実習前の教育的介入に関する評価として、

表３．学習項目間の相関関係

		実習前 n=72						実習後 n=73					
		対人関係	看護過程	看護技術	安全性・責任	倫理的配慮	基礎知識・学習方法	対人関係	看護過程	看護技術	安全性・責任	倫理的配慮	基礎知識・学習方法
実習前	対人関係												
	看護過程	0.015											
	看護技術	0.309**	0.184										
	安全性・責任	0.422***	0.105	0.103									
	倫理的配慮	0.119	0.070	0.019	0.053								
	基礎知識・学習方法	0.039	0.503***	0.212	0.054	−0.021							
実習後	対人関係	0.343**	0.118	0.072	0.065	0.056	0.059						
		−0.183	0.365**	−0.051	−0.078	−0.180	0.356	0.109					
	看護技術	0.154	0.109	0.125	−0.003	0.038	0.151	0.113	0.208				
	安全性・責任	0.359**	0.115	0.103	0.140	0.042	0.138	0.538***	0.043	0.163			
	倫理的配慮	0.118	0.123	−0.059	0.174	0.211	0.135	0.403***	0.152	−0.087	0.565***		
	基礎知識・学習方法	0.085	0.128	−0.042	0.140	−0.072	0.145	0.404***	0.388***	0.08	0.342**	0.315**	

**p<.01, ***p<.001

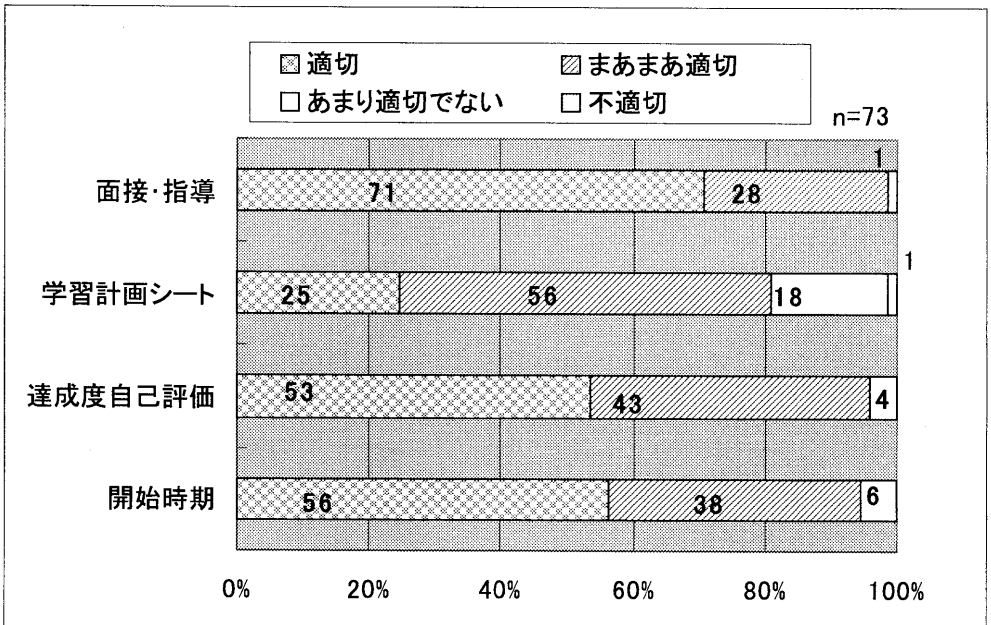

図１．学習計画への支援に関する評価

<学習支援開始時期>、<シートを用いた達成度自己評価>、<シートを用いた学習計画立案>、<担当教員による事前面接・指導>の４点について学生に調査した。その結果を図１に示す。

まず、<学習支援開始時期>については、56％が［適切］、［まあまあ適切］の38％を加えると94％が妥当だったと回答しており、「ゴールデンウイーク前でよかった」、「準備する上で十分な時間が得られた」等の自由記述があった。

次に、<シートを用いた達成度自己評価>については、53％が［適切］、［まあまあ適切］の43％も加えると96％が妥当だったと回答し、「自己の課題について項目毎に振り返ることができてよかった」、「文章化することで自己の課題を明確にすることができた」、「もっと細かい項目だと更に目標が見えやすかったと思う」等の意見があった。

さらに、<担当教員による事前面接・指導>については、［適切］が71％と最も高く、［まあまあ適切］の28％を加えると99％が妥当だったと回答しており、「面接で必要な事前学習が明確になった」、「苦手部分にアドバ

イスがもらえ実習への不安も軽減した」、「面接時に整理できていなかったことも言葉で表すことを通して徐々に自己の課題を明確にすることができた」、「自分の悩んでいることや弱み、課題を教員に知ってもらうことで安心して実習に臨めた」、「欠点だけでなくよい点についても話してくれ、実習を頑張って乗り越える気持ちにさせてくれた」等で否定的な意見はなかった。

しかし、<シートを用いた学習計画立案>については、［適切］が25％と最も低く、［まあまあ適切］が56％、［あまり適切でない］が18％、［不適切］１％であった。自由記述でも、「スケジュールを立てて学習する機会となり、学習内容が明確になった」、「文章化することで整理ができた」、「自由に書ける様式で戸惑ったが形式に捕らわれずに記入できた」等の意見がある反面、「具体的に記入することは難しかった」、「計画は目安になったが達成できずストレスになり自分に適さないと思った」、「他の領域の実習が先にあったので優先順位が考えにくかった」、「必要をあまり感じなかった」等の否定的な記述もあった。

その他、取り組み全体についての自由記述では、「少し焦りが強くなったが実習前事前学習支援のおかげで事前学習を意識し効率的に学習を進めていくことができた」、「おそらく実習前学習支援がなければここまで自己学習を早めに始めていなかったと思う」、「実習前から意欲的に事前学習を行うことができた」、「計画的に事前学習に望む環境を整えることができた」等の意見があった。

V．考　察

1．実習達成度自己評価について

国立大学医療技術短期大学部看護学科協議会臨地実習委員会は、国立医療技術短期大学部を対象に実習固有の学習課題として、“人間関係を成立させる学び”、“知識・技術・態度の統合の学び”、“専門職業人として身につけるべき姿勢・態度”、“看護実践の価値認識の学び”の４領域を明らかにしている[4]。今回の実習達成度自己評価に用いた６項目と照らし合わせてみると、“人間関係を成立させる学び”は【対人関係】、“知識・技術・態度の統合の学び”には【看護技術】【看護過程】【基礎知識・学習方法】、“専門職業人として身につけるべき姿勢・態度”には【倫理的配慮】【安全性・責任】が相当していた。しかし、“看護実践の評価認識の学び”に相当する項目はなかった。この“看護実践の評価認識の学び”は、それらの学習内容を拠り所に他の学習内容を拡大・深化させており、具体的には、患者の闘病姿勢や生きる力に感動して、看護する喜びを感じ、看護のやり甲斐やさらに看護を深めたいとの動機づけにつながっている[5]という。また、一般に看護実践の価値認識に含まれる内容は、専門職業人としての姿勢・態度とも関連性が深いと考えられるため、今回の６項目に共通して含まれていたと解釈することができる。しかしながら、この学習内容は、各項目に含めるよりも、実習固有の学習項目として具体的に取り上げ、実習でしか体験できないものを着実な学びとして学習者自身が意識してゆけるようにすることやそれに対する意図的な支援が重要と考える。

今回は、全体あるいは各項目別でも実習前に比べて実習後に有意に高得点を示しており、実習経験を通して、着実に実習固有の学習内容を積み重ね、必要な能力を獲得していることが伺える。

また、実習前後共通して【安全性・責任】や【倫理的配慮】の項目が上位を占めていた。これは、看護基礎教育で患者の安全は基本的要素であり、ケアする者の基本的な姿勢・態度を繰り返し指導していることや、実習前と比較して実習後は注意深さ・安全への配慮が有意に高くなった[6]、あるいは学生が実習を通じて看護倫理とは「患者の真のニーズを確認すること」であり、基本的姿勢は「言葉遣い」「挨拶」「プライバシーの保護」に注意することと認識している[7]ことなどからも学生自身その意識は強く、それが結果に反映されていたものと考えられる。

さらに、実習後に【対人関係】が最も高得点を示していた。これは、４年次までの様々な実習体験の積み重ねから関係性能力を高め、対象を多面的にとらえ個別的な看護を実践する上で必要な患者－看護師関係の成立が可能になってきていることが推察される。さらに実習後は、全体的に見ても項目間の相関関係が高まっており、基礎知識をもとに対象をトータルでとらえるような看護実践ができる方向に学習が深化してきているとも解釈

できる。

しかしながら、実習前後ともに、【看護技術】、【看護過程】、【基礎知識・学習方法】は、項目得点順位下位（４・５・６位）を占めており、学生が実習で、なかなか学習効果を自覚できない項目として認識されていたことが伺え、東他[8]の調査と同様の結果を示していた。中でも【看護過程】の達成率は20.8％から82.3％と上昇していたが、項目得点順位は、最下位から５位と低かった。これは、実習で現実の対象者と対面し、相互作用を通じて看護問題解決過程を体験し、全体的に理解は深まってきているといえるが、看護過程の構成要素が複数あり、確実な達成感を抱くまでには至っていないとも推察される。また【看護技術】の達成率は、68.1％から86.3％と高くなっており、項目得点順位は４位から最下位となり、実習後には他の項目との相関関係が全く認められなくなっていた。これは、臨床現場で、看護業務の多忙、リスクマネージメントの強化、患者の権利意識の高まりなどから学習途上にある学生の技術経験の範囲や機会が限定されている現状がある[9]ことで、技術体験の不足や事前演習の不十分さから自信のなさを生み、積極的な実施に至らなかったことが考えられる。あるいは寝衣交換など学生にとって難易度の高い技術という感覚が低い技術でも、輸液が実施されている場合などは単に、袖に点滴を通すという行為のみでなく、点滴の刺入部の観察や接続部、逆流防止などの複数の技術が重なった行為であること、すなわち、多くの技術が単独の行為ではなく、複数の技術が連続していること等を認識してきているとも推察される。しかし、知識の自己学習のような学生自身でできる準備や努力が比較的成功につながりやすい看護技術は、学生の意欲を向上させ実習評価を高める[10]ともいわれるため、今後は、時期を考慮した学内演習の検討や実習中は実施できていることを認め、その技術と他の学習項目との関係を意識できるように指導することも重要と考える。

一方、項目間の関連についてみると、実習後に【基礎知識・学習方法】を基盤とした学習項目間に有意な相関関係が認められていた。東[11]は、学習態度の形成過程と教育的支援の関連において、前回の実習の整理を行い自己の学習課題を明確にし、指導者と共有することによって学習効果を高めてゆくと述べており、今回の実習達成度自己評価による課題の明確化や担当教員による面接が学生の学習態度形成を助長し、効果的な事前学習や、それによる達成感や自信を生み、それらが実習中の他の学習項目にも影響を及ぼしていたと考えられる。

２．実習前の教育的介入に関する評価について

学生は実習を迎えるにあたり、様々な不安を抱えている[12][13]が、その一方で適度な不安が動機づけになり、前向きな学習の準備状態にあるとも考えられる。今回のように早い時期から実習を意識させることは、学習の準備状態に立たせるという意味で意義のあることと考えられ、自由記述からも余裕を持って学生自身が学習準備に取り掛かれた妥当な時期からの支援だったと考える。

また、今回これまでの実習経験の達成度を振り返り、具体的な数量化や記述をする自己評価方式を用いたことは、最終アンケートからも９割以上が有効な取り組みだったと肯定的評価をしていた。これは、自己評価のみでは過大評価や過小評価が起こりやすい[14]が、学生自身が自己の進歩を知るには効果的で、学習の動機付けにもなる[15]という評価方法の特徴や、具体的項目を示したことによる課題の明確化を助長したことが結果に反映されたと推察される。

一方、教員との事前面接による学習支援は、99％が肯定的な取り組みと評価していた。阪本他[16]は、学生に対する援助的関わりとして、学生に関心を示す態度や学生に対する支持的態度、学習の深まりや理解を促す指導等が重要と述べているが、今回の自由記述等からも面接の実施による学生への関心や、面接時の教員の学生に対する支持的態度すなわち、実習前の不安な感情やこれまでの実習での取り組み姿勢を肯定的に捉え支持する態度が教員にあったと学生が認識していたことが伺えた。またこのように、自分の個別的な状況を教員に理解してもらえたことが不安を緩和し、学習意欲を高め事前学習の充実がはかれ、結果として達成感の高い実習につながったと考えられる。

しかしながら、学習計画に関しては、学生の自由記述からも効果的に活用できなかったことが推察される。そのため、学生が個別的な課題内容に沿った具体的計画（学習内容・量・方法・時期）が立案できるような効果的な教育支援の検討も急務と思われる。

Ⅵ. 結　論

今回、実習前後の達成度自己評価および事前面接による学習支援に関する評価について、以下のことが明らかになった。

1）実習達成度自己評価の項目全体の平均値は、実習前は2.65±.34点、達成率は57.7％、実習後は3.24±.27点で、達成率89.7％であった。

2）達成度が最も高かったのは、実習前で【安全性・責任】の2.99±.66点、達成率は77.7％、実習後は【対人関係】3.57±.60点、達成率94.5％であった。

3）達成度が最も低かったのは、実習前で【看護過程】2.18±.45点、達成率20.8％、実習後は【看護技術】2.94±.50点、達成率86.3％であった。

4）項目全体の平均値は、実習後が有意に高得点を示し（$p<.05$）、項目別でも全項目、実習後に有意に高得点を示していた（【看護技術】；$p<.01$,【対人関係】【看護過程】【安全性・責任】【倫理的配慮】【基礎知識・学習方法】；$p<.001$）。

5）項目間の関連では、実習前においては、【対人関係】は【看護技術】（$r=309, p<.01$）や【安全性・責任】（$r=.422, p<.001$）と、また【看護過程】は【基礎知識・学習方法】（$r=.503, p<.001$）と有意な相関を認めた。しかし、【倫理的配慮】はどの項目とも関連は認められなかった。

実習後では、【基礎知識・学習方法】は【対人関係】（$r=404, p<.001$）、【看護過程】（$r=388, p<.001$）、【安全性・責任】（$r=342, p<.01$）、【倫理的配慮】（$r=315, p<.01$）と、また【倫理的配慮】は【対人関係】（$r=403, p<.001$）や【安全性・責任】（$r=565, p<.001$）と、さらに【対人関係】は【安全性・責任】（$r=538, p<.001$）と有意な相関を認めた。しかし、【看護技術】はどの項目とも関連は認められなかった。

6）実習前の教育的介入に関する評価では、＜学習支援開始時期＞は、「適切」と「まあまあ適切」を合わせて94％が妥当と回答し、＜シートを用いた達成度自己評価＞では、同様に96％、＜担当教員による面接・指導＞では、99％が妥当と高い評価が得られた。しかし、＜シートを用いた学習計画立案＞では、25％が「適切」、56％が「まあまあ適切」、「あまり適切でない」が18％、「不適切」が１％と回答しており効果的に活用できていない状況が伺えた。

Ⅶ. おわりに

今回、実習前後における学生の実習達成度自己評価の実態を捉えることができたと共に、実習直前ではなく、ある一定期間前からの学習支援面接が高く評価されていたことが確認できた。しかし、実習固有の学習項目の再検討や学生個々の課題に沿った事前学習の計画立案・指導法を早い段階で具体的にしてゆくことは課題と思われる。今後も改善点を考慮した実習前の学習支援を継続してゆく必要性を強く認識した。

引用文献

1）舟島なをみ：看護教育学研究の成果に見る看護学実習の現状と課題、Quality Nursing, 7(3), 6-14, 2001.

2）桑村由美他：臨地実習における学習内容に対する学生の達成度の認識－臨地実習開始前、中、後における自己評価の変化の分析から－、Journal of Nursing Investigation, 2(1), 7-15, 2004.

3）木下由美子・川上千普美：看護学臨地実習における学生の学習目標達成度の評価に関する文献検討、九州大学医学部保健学科紀要、8, 49-58, 2007.

4）森田敏子 他：臨地実習固有の学習内容と教育的課題、看護教育、38(1), 40-45, 1997.

5）東　サトエ 他：４年制看護大学の臨地実習教育に具備する条件に関する研究－臨地実習固有の学習内容の到達度評価による考察－、鹿児島大学医療技術短期大学部紀要、9, 49-59, 1999.

6）村上静子 他：看護学生の安全についての意識の現状－成人看護学実習の経験を通して－、第34回日本看護学会論文集（看護教育）、9-11, 2003.

7）金子まゆみ・上澤悦子：看護学生が臨床実習

において看護倫理として認識していたこと、第37回日本看護学会論文集（看護総合）、351-353, 2006.
8）前掲 5）
9）石井邦子：「看護学教育のあり方に関する検討会（第二次）」を終えて、看護教育、45(6), 435-462, 2004.
10）大川百合子 他：看護学実習における実習過程評価と看護技術の経験との関係、南九州看護研究誌、5(1), 67-73, 2007.
11）東　サトエ：臨床実習の教授＝学習構造に関する実証的研究－看護過程の展開能力・学習態度形成・教育的支援の関連性－、鹿児島大学医療技術短期大学部紀要、5, 35-46, 1995.
12）三木園生：成人看護学実習前後の学生の不安について、桐生短期大学紀要、14, 105-107, 2003.
13）中山和美 他：看護学生の長期実習前後の心理変化と実習成績の関連に関する研究、昭和医会誌、66(1), 29-37, 2006.
14）佐々木幾美：看護学実習評価の変遷、日本看護学教育学会誌、10(4), 7, 2001.
15）永家智子：臨地実習における看護過程の学習状況－看護学生の自己評価から－、九州大学医療技術短期大学部紀要、29, 39-50, 2002.
16）阪本みどり 他：看護学実習における臨床指導者の教授行動・教授態度－看護学生に対する援助的関わり－、日本看護学教育学会誌、10(2), 105, 2000.